

探ることを試みた。

我国における道德性の心理学的研究の動向

大西文行

我国の、特に過去10年間に本総会で発表された道德性についての研究の動向について触れる前に、道德性をどのようなものと考えているかについて Rest の分析を基にして述べた。

Rest, J.R. は、道德性の構成要素として、道德的思考、道德的情動と道德的行動という3分法は、研究上は有効であるが、理論的に明解な分析単位や種々な要因の相互関連づけやそれらの過程を表象する適切な方法ではなく、道德的行動の生起に含まれる構成過程として、4つの構成要素を提唱している。

1, 状況の解釈と道德的問題の同定。2, 為すべき事の計算、適切な道德的規準または理想を適用する活動計画の構成。3, 道德的または道德と係わらない価値の実現のための種々な活動推移の評価と実行への意思決定。4, 活動計画の実行。である。

Rest は、これらの構成要素が、どのように相互に作用し、道德的行動の生起影響するかを研究することが必要であると論じている。

Rest のこの考えは、Cofer, C.N. が論じているように、行動の cool な側面の強調であり、行動の hot な側面をも考慮する必要がある。

また、これらの構成要素や行動の両側面を統合するものとしての人格・行動の主体をも考慮することが必要である。

このような観点から、我国、特に過去10年間の本総会での道德性についての心理学的研究には偏りがみられる。

道德性心理学の今後の課題は、道德性を構成する要素・過程や側面についての統合理論の構築にあると考えられる。

認知的発達理論と道德性研究

内藤俊史

道德性の発達研究に携わる者として、絶えず問い続けられる2つの問いは、1, 道德性とは何か? 2, 道德性の「発達」とは何か? である。研究者の設定する「道德性」や「発達」の方向に関して、必ずしも一般人や教育界からは同意は得られていないが、さまざまな立場でそれらを考えることが必要であり、それらが「競い合っている状態」が道德性心理学の発達にはよいと思われる。

Piaget や Kohlberg 等の認知的発達理論的観点から

道德性を研究して得られた事について考える。道德性の中心として「公正性」、すなわち「正しい規則」を決める際により普遍性をもつ方法上の規則を考えられ、この考えから、発達は、「だれもが、同様な状況でその行為をしても、承認しうる」とか「どの立場に立って考えても、その行為を承認し得る」の方法上の規則についての道德的論議に参加しうることであり、あるいは、そこで十分に適切な原則をもつこと。であるといえる。

認知的発達理論の展開について考えると、Kohlberg の研究は、1970年以前、1980年までとそして1980年以後に分けることができる。1970年以前は、Kohlberg の段階理論の適用性についてである。この時期には、個人の発達段階は、従属変数として、また、縦継・横継的研究での年齢や役割取得の機会などの一般的経験を独立変数として扱われていた。

その後は、Kohlberg の環境や、文化の捉え方が、Haberman や Simpson らにより論議された。Kohlberg は、環境や文化をより高い発達段階への指向を促進するものとして捉え、それへの適応的側面に注目したのであるが、Haberman らは、果たして高い段階に行くことが適応的であるか、すなわち文化はそれほど高い価値をもつかについて疑問を呈した。

この環境論議が、1980年以降2つの研究方向を生んだ。1つは、Interaction についての Turiel や Schweder らの方向であり、ここでは、議論の種類によって異なった相互作用が存在することが仮定されている。他は個人の発達段階と集団の発達段階、Kohlberg の言う justice structure との関係での研究の方向である。

現在は、個人の発達段階を独立変数として扱うのではなく、個人と環境の相互作用として研究がされていると考えることができる。

幼児・児童の道德性の発達研究について

二宮克美

幼児・児童の道德性の発達研究について、行動的側面以外について概観する。

第1には、Piaget の道德的判断に関する研究である。Piaget は、より広範な観点から児童における道德的判断の発達を研究したのであるが、その後の追試研究は、その一部である客観的判断から主観的判断への発達過程に焦点を当て、他の側面についてなされることが少ない。1983年に Kurtines & Pimm は Piaget の論及した殆どの側面を扱い標準化を試みている (the moral development scale)。

Piaget の二段階説の再検討についての研究では、二宮や Gutkin らの研究があり、意図の認知水準の差異